

[資料：研究促進委員会報告]

質的に家族全体を捉える家族看護学研究

堀口 範奈¹⁾ 西垣 佳織¹⁾ 小林 京子¹⁾ 法橋 尚宏²⁾

要 旨

家族看護学研究には、家族と家族員の混同、家族員の健康と家族ウェルビーイングの混同、家族看護学関連研究と家族看護学研究の混同、特有な価値観とビリーフが形成されているひとびとをシステムかつユニットとしての家族として捉えられていないこと、一部の家族員が捉えた家族へのアプローチが中心となっていることなどの課題が存在する。研究促進委員会では、家族看護学研究の課題解決に向けて継続的にアプローチしてきた。今回は、質的に家族全体を捉える家族看護学研究を掘り下げするために、*Journal of Family Nursing*の掲載論文から、“家族の捉え方が面白い研究”として家族全体を捉えることに挑戦している論文と看護実践から家族を捉えることに挑戦している論文、“研究手法が特徴的な研究”としてブログからデータ収集をした論文と写真を用いたインタビューを行った論文の合計4本紹介し、家族全体を捉えることを検証した。

キーワード：家族看護学研究，家族全体，質的家族看護学研究

I. はじめに

家族看護学研究には、いまだに様々な課題が山積している。今期（2019年9月～2022年6月）の研究促進委員会では、家族全体を捉えるという家族看護学研究に特有の課題をとりあげ、これまで検証を重ねてきた。その最終段階として、量的研究と質的研究の先駆的な取り組みを共有・討議する2回のセミナーを企画し、第7回家族看護学研究セミナーを2021年10月3日に日本家族看護学会第28回学術集会において、“家族看護学研究の大冒険：量的に家族全体を捉える”をテーマにバーチャルで開催した。これに続けて、2022年2月26日に“家族看護学研究の大冒険：質的に家族全体を捉える”をテーマとして、第8回家族看護学研究セミナーをバーチャルで開催した（図1）。本稿では、この成果を報告する。

II. 家族看護学関連研究と家族看護学研究

1. 家族と家族員の混同

日本語では、“家族員”と“家族”が混同されていることがあるので留意する。たとえば、一般的に“家族が入院”というのは“家族員個人が入院”、“家族の心身の安寧”というのは“家族員個人の心身の安寧”のことを意味する。また、たとえば、終末期家族看護とは、終末期の家族員がいる家族システムユニットへの支援（終末期個人看護）ではなく、解体が避けられない状態にある家族システムユニットへの支援であり、家族員のウェルネスの実現のためにも家族システムユニットを解体することがある（法橋，本田，島田，他，2016）。

家族と家族員の混同を避けるために、家族員を対象とする場合は、家族員と明確に表現（記述，口述）したり，父親（夫），母親（妻），主介護者のように立場を明確に表現（記述，口述）するようになる。

1) 日本家族看護学会研究促進委員会委員

2) 日本家族看護学会研究促進委員会委員長

家族看護学 研究の醍醐味! 第2弾
「家族全体を捉える研究方法」をお伝えします

日本家族看護学会研究促進委員会主催

第8回
家族看護学研究セミナーのご案内

テーマ **家族看護学研究の大冒険**
質的に家族全体を捉える

司会: 小林 京子 (聖路加国際大学看護学研究科)

第1部 13:00~14:20
講演説明: 法橋 尚宏 (神戸大学大学院保健学研究科)
質的に家族データを扱っている研究紹介:
*Journal of Family Nursing*より

講演1 家族の捉え方が面白い研究
堀口 範奈 (大阪大学大学院医学系研究科)

講演2 研究手法が特徴的な研究
西垣 佳織 (聖路加国際大学看護学研究科)

第2部 14:40~16:00
指定発言 **家族看護学研究における質的研究の意義**
木下 康仁 (聖路加国際大学大学院看護学研究科)

●参加者との意見交換 ●まとめ

日時 **2022年2月26日(土) 13:00~16:00**

場所 **バーチャル会場 (Zoomミーティング)**

●定員: 300名 (先着順となります)
●参加費: 日本家族看護学会会員: 無料
その他: 2,000円
(日本家族看護学会の非会員の方でも参加できます)

●参加方法: 下記のURLから、2022年2月24日(木)までにお申し込みください
<https://questant.jp/q/PHS2FG8T>

留意事項 ●非会員の方の参加費は申し込みURLを参照ください
●銀行振込控えを領収書に代えさせていただきます
●本セミナーの参加証明書は発行いたしません

お問い合わせ:
日本家族看護学会研究促進委員会
委員長 法橋 尚宏 (E-mail: rpc@jarfn.org)

図1. 第8回家族看護学研究セミナーのフライヤー

2. 家族員の健康と家族ウェルビーイングの混同

家族の健康は、“家族機能が良好であること”である。健康という概念は、個人看護学で使用する用語であり、家族の健康とは家族員全員が健康であり、家族員の健康の総和であるという考え方は不十分である(法橋, 他, 2016)。家族同心球環境理論(Concentric Sphere Family Environment Theory, CSFET)は、家族ウェルビーイングに作用する家族環境と家族システムユニットを捉える理論である。すなわち、“家族の健康”の概念をライフ(生命, 生活, 人生)という視点からより幅広く捉えて、家族員が幸福なライフを実現でき、家族機能が家族の期待どおりに作動することを含意した“家族ウェルビーイング”という概念が必要である。

3. 家族看護学関連研究と家族看護学研究の混同

日本家族看護学会の機関誌などの論文をみると、“真の家族看護学”は“家族システムユニット”を対象としているにもかかわらず、家族員を対象とした個人看護学と混同した研究が多い。すなわち、“家族員のための看護学研究(いわゆる家族看護学関連研

究,あるいは家族員研究)”と“家族のための看護学研究(いわゆる家族看護学研究,あるいは家族システムユニット研究)”とが混在している状況にある(法橋, 2012)。“家族看護学関連研究”と“家族看護学研究”を区別できるようになれば、個人看護における家族支援と家族看護における家族支援の相違を明確にでき、家族看護学の発展に寄与できる。

4. 構築主義的家族論

看護職者が家族を看護の対象として捉えるのは、他者性(客観性)を基盤として実践する家族支援である。しかし、家族はひとびとの日常実践によって構築されるのであり、自分がどのように関係しているかという家族員の当事者性が重要である。すなわち、家族が自ら問題現象を認識し、それを組織的に解決し、家族機能を高めるという当事者性(主観性)を基盤にした家族支援が必要とされており、看護職者は他者性と当事者性という二重性を意識しながら家族支援を実践することで実効的なものとなる(法橋, 2019)。

家族とは血縁共同体であり、普遍的な構造や機能をもっている集団(実体)であるという定義は、当事者性に立脚していない。構築主義の立場では、家族はひとびとの活動によって構築されるのであり、家族は概念である。すなわち、家族について語られるディスコース(discourse, 言説)によって当の家族が構築されるのであり、血縁によってつながっている親子に限定されない。家族看護学が対象とする家族は、所与の固定したものではなく、ひとびとの相互作用を通じて構築される現象である。家族看護学では、特有な価値観とビリーフが形成されているひとびとをシステムかつユニットとしての家族として捉える。

5. 家族の定義

家族とは、“他の構成員から帰属認識されているひと(生者)の和集合で構成されるシステムとしてのユニット組織”である(Hohashi, 2019)。家族員がもつ“われわれ意識”は、われわれではない他の集団の存在によって境目(家族インターフェイス

膜)が設定される。ここで、生者は、出生から死亡までの範囲とする。家族は多様化しており、同居の有無、血縁関係(親子・きょうだいなどの関係)や婚姻関係(夫婦などの関係)は問わない。なお、血縁関係は、親子・きょうだいなどにはあるが、夫婦間にはない。

“家族”に関するディスコースやその意味は、ひとつの数だけある。家族は、ある特定の文化的脈絡において構築される社会制度のひとつであり、家族はあまりにも多様で、絶えず変化しており、厳密に定義することが困難である。家族看護学においては、家族の多様性と普遍性を考慮した家族アセスメント、家族支援(家族ケア/ケアリング、家族ヒーリング、家族スピリチュアリティ支援)が求められる。

6. “片想いの家族員”問題, “妻たちの家族看護学”問題

“片想いの家族員”問題は, “家族員が認識する家族システムユニットの範囲(家族インターフェイス膜の所在)が各家族員によって異なり, 家族看護学の対象である家族システムユニットの範囲を正確に特定できないという問題”である。ある家族の家族員に「誰が家族員ですか?」と尋ねると, 各家族員によって返事が異なることが往々にしてある。あるひとを家族員と認識する家族員がいれば, 認識しない家族員もいるので, 家族の範囲を同定することは容易ではない。すなわち, 自分は相手を家族員であると認識しているにもかかわらず, 相手は自分を家族員であると認識していない状態(片想い)が生じる。法橋は, この家族の範囲の難解さを“片想いの家族員”問題として提起した(法橋, 本田, 2014)。

“妻たちの家族看護学”問題は, “家族看護学は, 家族全体(家族システムユニット)を対象とするパラダイムをもつにもかかわらず, 研究や実践の対象者(自記式質問紙の回答者, 家族アセスメントツールの回答者, 家族インタビュー/ミーティングの対象者など)は家族員個人が単位となり, 理論の水準(家族システムユニット)と方法の水準(家族員個人)との間で単位が異なるという家族看護学における根幹的

な課題(パラダイムミスマッチ)”のことである。

たとえば, 家族アセスメント尺度を用いた自記式質問紙調査では, データ収集の対象者は個々の家族員となるので, ひとつの家族から夫(父親)が回答した得点や妻(母親)が回答した得点などを得ることができる。しかし, 家族員間で必ずしも得点が一致するわけではないので, 家族システムユニットとしての得点を算出できない。対象者は妻(母親)であることが多いことから, 法橋は, これを“妻たちの家族看護学”問題として提起した(法橋, 2005)。妻(母親)の回答で家族全体を捉えられないので, 妻(母親)対象の家族看護となっている現状がある。

たとえば, 家族員全員が参加できない家族インタビュー/ミーティングの場合, まず, 参加している複数の家族員で相談し, 家族の範囲を決めてもらう。そして, とくに家族インタビュー/ミーティングに参加していない家族員について, “他の家族員との関係を深耕する質問”“他の家族員への影響を探る質問”“他の家族員の考えを探る質問”をすることで, 家族員情報ではなく, 家族情報を得ることができるようにする。

III. 家族の捉え方が面白い研究

本研究セミナーでは, *Journal of Family Nursing* に掲載されている論文より, 家族の捉え方が面白い研究を2本紹介した。

1. 家族全体を捉えることに挑戦している論文

Martín, Pérez-Diez-Del-Corral, Olano-Lizarraga, et al. (2022) は, 在宅での終末期ケアが各家族員に大きな影響をおよぼすため, これまで多くの研究が実施されてきたが, そのほとんどが主介護者を対象としたものであることを指摘している。実際, 本セミナーを実施するにあたり, 2019年から2021年の *Journal of Family Nursing* に掲載された原著論文をみると, 患者自身や患者とその主介護者を対象としたものが多かった。これは, 本委員会が家族看護学研究の掲載論文を調査した結果と類似していた

(西垣, 堀口, 小林, 他, 2021). そこでMartin, et al. (2022) は, 在宅で終末期を迎える成人家族員を介護する家族の体験について理解を深めるために, 対象とした9家族の家族員全員 (2名から4名/家族) に家族インタビューおよび家族員インタビューを行い, ナラティブ研究によってまとめている. 倫理的配慮から終末期にある患者, また, 認知症の家族員および若年者の各1名はインタビュー対象者から除外した.

まず, 本研究では, モデルを用いて家族を“コミュニケーション関係をもつ特定の集団”と捉えている. コミュニオンとは, お互いを“We”として認識しているメンバー間での個人的な関係をさすが, モデルを使用することで研究チームは家族を単なるメンバーの集合体以上の“We”と捉え, インタビューや続く分析まで統一することができた. 次に, データ収集は, 家族インタビューと家族員インタビューを実施した. 家族インタビューでは終末期を迎えた家族員をどのように介護したかが尋ねられ, 家族員インタビューはその補完として実施された. 家族インタビューでは家族全体としてどのような経験をしたのかに焦点を当て, 広範囲な家族の経験が明らかとなった. 一方, 家族員の中には, 自身の発言が他の家族員を批判したり, 傷つけたりするのではないかと考え, 家族インタビューでは自由に話ができないという報告もあった. そのため両者を上手く活用することが, 家族の経験を理解するためには非常に重要であった. 最後に, 分析はナラティブ分析を用いている. ナラティブ分析は, 物語られた形式をもつテキストを解釈するための方法の集まりであり, 研究者は特定の社会的な場所と, 特定の社会的な時間における特定の行為者に焦点を当て, 単に言葉が表している内容ではなく, ある出来事がなぜ, どのように語られるのかを問うと説明している (Riessman, 大久保, 他監訳, 2014). 本研究では, 在宅という場所で, 終末期の家族員をケアするという時間, ケア実施者としての家族に焦点を当てた研究であり, 家族の体験を明らかにする有用な方法であっ

た. このように, モデルやナラティブ分析, 家族インタビューと家族員インタビューの併用によって, 家族員ではなく家族全体の経験を捉えることに挑戦している研究であった.

2. 看護実践から家族を捉えることに挑戦している論文

Ikandar, Dieperink, Hansen, et al. (2022) は, 終末期の話し合いへの関与の現状を, がん専門外来で緩和的化学療法を受けている難病肺がん患者, 家族介護者, 看護師の立場から調査することを目的として, 解釈学的現象学研究を実施した. 本研究における家族介護者とは, 患者によって定義された血縁関係のある親戚, 親しい友達, または両方と定義された. 研究参加者は, 患者9名, 家族介護者8名, 化学療法を実施した看護師11名であった. データは, 緩和的化学療法時における患者と医療職者の相談場面についての参加観察とインフォーマルインタビュー, 患者や家族介護者を対象とした半構造化インタビュー, そして看護師を対象としたフォーカスグループインタビューによって収集した. 半構造化インタビューでは, がん罹患以降の決定について, 外来や家庭での終末期の話し合いの経験などが聴取された. フォーカスグループインタビューでは, 終末期の話し合いについて, 経験, 困難や促進因子, 内容と時期などが話し合われた. 本研究では, 患者と家族介護者において必要な終末期の話し合いが行われにくいという家族内の現象について, 家族看護実践の担い手である外来看護師という外部の視点も含めて明らかにした点が非常に興味深い. さらに, 複数の研究手法を用いて収集したデータを解釈学的現象学によって分析を行った. 松葉, 西村 (2014) は, 解釈学的現象学における解釈を, 当たり前だと思われている意味, 実践, 習慣, 技能, 気がかりを明らかにすることによって, 研究参加者の世界を解明するものと説明している. 終末期の話し合いという話しにくいテーマであると一般的に認識されている現象について, 複数の方法で収集したデータを各参加者の視点を通して見直すことで, 各参加者の心

理的・社会的な特性や物理的な環境などが影響していることが明らかとなった。

IV. 研究手法が特徴的な研究

質的研究は、それぞれの手法に適したデータ収集方法が用いられる。家族全体の経験を捉えるための一方策として、*Journal of Family Nursing*に投稿された論文において、データ収集の手法が特徴的な2本の研究を紹介した。

1. ブログからデータ収集をした論文

Anderson, Bartmess, Hundt, et al. (2021)の研究は、認知症高齢者の家族介護者のブログで表現されている尊厳の概念について明らかにすることを目的に実施されていた。“ブログは介護者の生の経験が、個人と家族への介護の影響も含めて記載されている”とし、一般公開されているブログからデータ収集を行っていた。研究開始前には倫理審査委員会に研究計画書を提出して確認を受け、倫理委員会での審査は不要という判断を受けていた。その上で、ブログの著者らに研究参加を希望しない場合は研究者に電子メールで連絡できるようにするというオプトアウト形式で倫理的に配慮してデータ収集が行われていた。最終的に、米国と英国居住者の9件のブログ（著者は女性6名、男性3名）の2,345投稿を著者2名で時系列に整理し、尊厳に関する記述のみを抽出してデータとした。このデータに対し、ナラティブ分析の1つであるフレームワーク分析法にもとづいてJacelonの帰属的尊厳の4テーマ（Jacelon, Connelly, Brown, et al., 2004）を結果解釈の枠組みとし、クラウド上での質的データ分析・混合研究法での分析が可能な分析ソフトウェアdedoose (<https://www.dedoose.com/>)を使用していた。明らかにされた結果は、Jacelonの帰属的尊厳の4テーマと新たな1テーマであり、認知症高齢者の家族介護者の尊厳を説得力をもって示す内容となっていた。

これまでの医療保健分野では、ブログと同様に個人の経験を記したテキストデータである手記を用い

た研究が行われている（八木, 2009; 門林, 2020）。ブログの方が簡便かつタイムリーに発信ができるが、手記は自身の経験を振り返ってまとめることになる。ブログと手記、それぞれの特徴を生かした活用が求められる。質的研究で行われることの多いデータ収集方法であるインタビューは、研究者からの問いを受け、研究者と対象者の相互作用の中で対象者の思考が促されて充実したデータ収集が可能という利点を有し、ブログや手記からの情報収集ですべてを代替することは難しい。しかし、家族介護者のように慌ただしい日常生活を送っており、支援が必要であるが研究参加が難しい対象者は、その実際の経験を研究的にアプローチして把握することが難しい。したがって、このような状況にある対象者にとっては、新たに研究のためにデータ収集をするのではないブログは、貴重なデータとなると考えられる。また、ブログの利点は、そのときその時期の“家族に対する個人の思い”を豊かに捉えることができることにある。Anderson, et al. (2021)の研究は家族に関する概念を明らかにしたものであるが、家族全体の経験を明らかにする際にも、ブログは有効なデータ収集のツールであると考察された。

2. 写真を用いたインタビューを行った論文

Israelsson-Skogsberg, Markström, Laakso, et al. (2019)の研究は、在宅療養で人工呼吸器を装着しているこどものきょうだいの日常生活体験を明らかにすることを目的に実施されていた。スウェーデンの3病院の小児呼吸器外来に勤務するの看護師4人と医師1人が対象者をリクルートしていた。年齢、性別、きょうだいの関係で最大限のバリエーションを確保するために意図的サンプリングを行った結果、7~18歳の10名が対象者となった。きょうだいには、“ペット・親友・楽器など、日常生活で大切だと思うもの・好きなもの”を携帯電話のカメラで撮影してきてもらい、それらの写真は、研究者ときょうだいの会話を円滑に進めるためのきっかけとして活用されていた。写真を通じた会話で安心感を高め、研究者との関係を構築した上で生活全般につ

いて話してもらおうナラティブインタビューが行われていた。「あなたは何をするのが好きか教えてください」「きょうだいのことで悩んだり、嬉しかったりしたことを教えてください」などの質問が用いられていた。インタビューのほとんどは自宅で行われ、親が同席するか否かはきょうだいを選択していた。インタビューには2年半を要しており、アプローチが難しい対象者へのインタビューに丁寧に取り組んだことが伺われた。分析には解釈的現象学によるアプローチが用いられ、テーマ（サブテーマ・テーマ）を見出し、きょうだいの体験の構造を取り出し・読み解き・統合されていた。在宅療養で人工呼吸器を装着しているこどものきょうだいであることは、過去、現在、未来につながる複雑で深い絆が絡みあっている事象であり、この特有の絆が、きょうだいを多様性のために戦い、自分らしくある権利を守る覚悟をもった人間に形成していたことが丁寧に記述されていた。

写真を用いたこどもからのデータ収集は、データや知識を想起するきっかけとして有効に働き、深い感情、記憶、アイデアを呼び起こし、インタビューデータをより充実した意味深いものにしていった。こどもは発達段階の途上にあるため、こどもであるきょうだい自身の経験を言語的アプローチのみを用いて聞くことには、障壁があると考えられる。そのため写真を用いてインタビューを実施することは、

こどもであるという対象者の特徴に沿った方法と考えられた。結果として、写真を用いたデータ収集により、対象者自身の経験を把握しにくい家族員の1人であるこどもが認識した家族や家族の生活を質的に明らかにでき、発達段階による認識の状況による制約はあるが、きょうだい自身が経験している家族の生活が説得力をもって記述されていた。

これら2本の研究を通して、各対象者の特性や分析方法に応じてデータ収集の方法を工夫することは、家族全体を捉えることに貢献していたと考察された。

V. おわりに

今期（2019年9月～2022年6月）の研究促進委員会では、学会誌『家族看護学研究』に掲載された全論文を分析し、依然として家族全体を対象とした研究が少ないことを明確にした。そして、家族全体を捉える研究方法を構築するために、これまで合計5回の家族看護学研究セミナー（表1）を開催した（次回は2022年9月に開催予定）。次期の研究促進委員会においても、本学会設立趣意書にもとづき、温故知新の心構えで“家族全体を対象とする看護科学”の発展に貢献してほしい（法橋, 2021）。

表1. 今期の研究促進委員会が開催した家族看護学研究セミナー

-
- | | |
|----|---|
| 1. | 第4回家族看護学研究セミナー（2020年3月8日開催）
テーマ：家族看護を可視化する尺度開発プロセスとその研究・臨地応用
演者：中澤 港, 西元康世, 法橋尚宏 |
| 2. | 第5回家族看護学研究セミナー（2020年9月13日開催）
テーマ：臨床で活用できる『家族看護学研究』のエビデンスはどこまで来たか？
演者：法橋尚宏, 小林京子, 堀口範奈, 西垣佳織 |
| 3. | 第6回家族看護学研究セミナー（2021年2月27日開催）
テーマ：家族看護のエビデンスをあなたの日々の臨地で活用！
演者：小林京子, 法橋尚宏, 小野美雪, 伊藤咲季, 井出由美, 深堀浩樹 |
| 4. | 第7回家族看護学研究セミナー（2021年10月3日開催）
テーマ：家族看護学研究の大冒険：量的に家族全体を捉える
演者：法橋尚宏, 小林京子, 堀口範奈, 西垣佳織 |
| 5. | 第8回家族看護学研究セミナー（2022年2月26日開催）
テーマ：家族看護学研究の大冒険：質的に家族全体を捉える
演者：小林京子, 法橋尚宏, 堀口範奈, 西垣佳織, 木下康仁 |
| 6. | 第9回家族看護学研究セミナー（2022年9月開催予定）
テーマ：システムティックレビューにより家族看護のエビデンスを得る
演者：大田えりか, 法橋尚宏, 小林京子, 西垣佳織, 堀口範奈 |
-

文 献

- Anderson, J. G., Bartmess, M., Hundt, E., Jacelon, C.: "A Little bit of their souls": Investigating the concept of dignity for people living with dementia using caregivers' blogs, *Journal of Family Nursing*, 27(1): 43-54, 2021. <https://doi.org/10.1177/1074840720975216>
- 法橋尚宏：家族エコロジカルモデルにもとづいた家族機能度の量的研究：FFFS日本語版Iによる家族機能研究の現状と課題. *家族看護学研究*, 10(3)：105-107, 2005
- 法橋尚宏：家族看護学パラダイムのルネサンス, *家族看護学研究*, 17(2)：91-98, 2012
- Hohashi, N.: A Family Belief Systems Theory for transcultural family health care nursing, *Journal of Transcultural Nursing*, 30(5): 434-443, 2019. <https://doi.org/10.1177/1043659619853017>
- 法橋尚宏：FEM-J（家族環境地図）のアセスメントガイド（バージョン3.0対応版），エディテクス，東京，2019
- 法橋尚宏：日本家族看護学会の温故知新：過去を還り，将来を展ぶ, *家族看護学研究*, 27(1)：1, 2021
- 法橋尚宏，本田順子：FEM-J（家族環境地図）のアセスメントガイド，エディテクス，東京，2014
- 法橋尚宏，本田順子，島田なつき，道上咲季：家族同心球環境理論への招待：理論と実践，エディテクス，東京，2016
- Ikander, T., Dieperink, K. B., Hansen, O., Raunkjaer, M.: Patient, family caregiver, and nurse involvement in end-of-life discussions during palliative chemotherapy: A phenomenological hermeneutic study, *Journal of Family Nursing*, 28(1): 31-42, 2022. <https://doi.org/10.1177/10748407211046308>
- Israelsson-Skogsberg, Å., Markström, A., Laakso, K., Hedén, L., Lindahl, B.: Siblings' lived experiences of having a brother or sister with home mechanical ventilation: A phenomenological hermeneutical study, *Journal of Family Nursing*, 25(3): 469-492, 2019. <https://doi.org/10.1177/1074840719863916>
- Jacelon, C. S., Connelly, T. W., Brown, R., Proulx, K., Vo, T.: A concept analysis of dignity for older adults, *Journal of Advanced Nursing*, 48(1): 76-83, 2004. <https://doi.org/10.1111/j.1365-2648.2004.03170.x>
- 門林道子：「闘病記」という物語20：現代のがん闘病記と「肯定的変化」, *薬学図書館*, 65(4)：148-152, 2020
- Martín-Martín, J., Pérez-Díez-Del-Corral, M., Olano-Lizarraga, M., Valencia-Gil, S., & Saracibar-Razquin, M. I.: Family narratives about providing end-of-life care at home, *Journal of Family Nursing*, 28(1): 17-30, 2022. <https://doi.org/10.1177/10748407211025579>
- 松葉祥一，西村ユミ：現象学的看護研究：理論と分析の実際（第1版），医学書院，東京，2014
- 西垣佳織，堀口範奈，小林京子，法橋尚宏：『家族看護学研究』の掲載論文の家族の課題とエビデンスレベルの分析, *家族看護学研究*, 26(2)：223-229, 2021
- Riessman, C. K. / 大久保功子，宮坂道夫監訳：人間科学のためのナラティブ研究法（第1版），クオリティケア，東京，2014
- 八木剛平：手記から学ぶ統合失調症：精神医学の原点に還る，金原出版，東京，2009

Family Nursing Research that Qualitatively Captures the Whole Family

Hanna Horiguchi¹⁾ Kaori Nishigaki¹⁾ Kyoko Kobayashi¹⁾ Naohiro Hohashi²⁾

1) Member of the Research Promotion Committee, Japanese Association for Research in Family Nursing

2) Chairperson of the Research Promotion Committee, Japanese Association for Research in Family Nursing

Key words: family nursing research, entire family, qualitative family nursing research

Family nursing studies must confront a variety of problems, including confusion between family and family members; confusion between family member health and family well-being; confusion between family nursing-related research and family nursing research; the inability to view a group of members having a unique sense of values and beliefs as a family in terms of being a system or a unit; and a focus on the approach toward family as perceived only from the perspectives of certain family members. The Research Promotion Committee has continuously approached family nursing with the aim of resolving these issues. To explore family health care nursing research that qualitatively deals with the entire family, we have selected articles from the *Journal of Family Nursing* that make an effort to take up the entire family as "interesting research methods for capturing the family," which took up the challenge to deal with the entire family and attempted to capture the family from the perspective of nursing practice. The remaining two articles, which can be described as "studies applying distinctive research methods," collected data from blogs and conducted interviews using photographs.